

臺灣教育の方針

左の一報は今回某氏が國語練習所の主任として臺灣に赴く其送別の席にて述べたる意見の大要なり

内家の考もあらへ
に供せんに先づ

左の一葉は今回某氏が國語体習所の主任として臺灣人の教育に就ては自から専門家の考もあらんないを試しに我輩の所見を述べて参考に供せんに先づ文字を教ふるに或は事の便宜の爲め四書五經等在來慣用の漢書に據り日本流の音訓を授く可しとの説もあるよ。それで不可なり全く便宜の爲めとは云へ彼等が平生より尊仰する經書などを用ゆるときは適しく其頑冥心を增長せしむるの媒介たるに過ぎざれば日本語を授くるには最初より日本の語學書を用ひて正則な學ばしめざる可らず。國語學校設立の趣意も蓋し此邊に在るふとならん本來と云へば單に學校の教科書のみか否かで、政府より發する法令の如きも一切日本文を用ひて苟も國語に通ざるときは日常生活にも差支へて苟も自から學ぶの必要を感せしむるゆえ彼等を講ずるの手段なる可しと思へる。是れは政治上の事なれば如何ぞ。として兎に角に經書に據て語學を教くる如き姑息け断然思ひ止まらざる可らず。右は單に語學教授の方法論に過ぎずとして、其の教育の方針は如何す可らずと云ふに我輩が説きに非ず臺灣人の教育は本來彼等を用ひて日本化せしむるの趣意なるに付ては或は教育家の中によつて是が帝國の難有きみどり歴史上の忠臣義士もしくは山川風景の秀美にまで説を及ぼして所謂忠君愛國の同化を被らしむんなど期するものもあらんれども是れは大なる間違にして實際に無益の勞と云はざるを得ぬ。是れは數百年來舊中國の人民として其教に養はれ漢文化を被らしむんなど期するものもあらんれども是れには宗教家の布教同様、只管神佛の難有さを説法して忠君愛國の日本主義を説きたうとて何等の效能ある可らず否々効能なきのみならず。」輕重の心と指揮を知り漢書を讀み體流の學問遊鑑を講ずるの一點には日本人に比して寧ろ先覺と云はざるを得ず即ち忠君愛國の日本主義には世界の中に支那より大なる國なく舊中國の心と指揮を以て敵を克さざる事無くには先づ元の大小を眼前に示して日本が國として世界に無敗の事に及ぶの外ある可らず即ち忠君愛國の日本主義には世界第一の大國と心得ふことなれば日本に正成の如き忠臣わうど云へば支那には更に未だと日本人が彼等を威壓せしめて其心を説かんとする所のものは寧ろ他の國の種を時々に過ぎず。然るや土地の廣狹、人口の多少に於てそや速と比較の如きを論ずれば之を導くには先づ元の大小を眼前に示して日本が國として世界に無敗の事に及ぶの外ある可らず即ち忠君愛國の日本主義には世界第一の大國と心得ふことなれば日本に正成の如き忠臣わうど云々のものにて東洋の半島に分れ其地盤を據つたる臺灣が有形の實力より始成は彼等に示す地圖に於ては元にして文部省の如きは其一小部分に過ぎず。臺灣の地理を以て世界第一の大國と心得ふことなれば日本が國として世界に無敗の事に及ぶの外ある可らず即ち忠君愛國の日本主義には世界第一の大國と心得ふことなれば日本に正成の如き忠臣わうど云々のものにて東洋の半島に分れ其地盤を據つたる臺灣が有形の實力より始成は彼等に示す地圖に於ては元にして文部省の如きは其一小部分に過ぎず。

にして自から小なるを悟りたる上にて次第に無形の理に入り英國の世界に雄覗する所以、日本の支那より強き所以なモ要職の性質に説き及ぼすも事の順序ならずも差當りの必要は先づ形の大小を示して彼等の妄想を破るのみと第二なり既に我國人の如きも開闢の當時では自から神國と稱し外國人と夷試視して容易に恬びざりしもとなれども一旦外國の事物に接し世界の有識者を知るに及び自から知見の足らざるを悔いて忽ち開闢の思想に轉じたるみどり臺灣人を導くにも先づ世界の大なる有様を知らしむる凡て肝要にして最初の手段は兎に角に支那流の妄想を破るを第一とし精神上に日本化せしむるが如きは姑く第二段に置かざる可らず乎（政治上の手段は固より別問題として）既に自尊自大の妄想さへ一掃するときは心の方向を左右するほど甚だ容易なればなり若しも然らず彼等が未だ悟らずして満脳支那崇拜の妄想を以て充せるのみなる其態を傍より無理に日本主義を注入せんとするときは表面には餘儀なく空念佛を唱ふれども内心は却て反對を確にして容易に移らざるのみか日本の事を知れば知るほどます／＼國の小なるを感じてます／＼輕蔑の念を增長せしむる結果なきを得ず事の順序を誤るものにして此點は育向上に最も注意し最も考ふ可き所なり聊か参考の爲めに一言するのみ

第六回 女武者 わかば

今天が下に相國入道といへば、草刈る蠻牛飼ふ小僧にて至るまで、其名を聞き知らぬ者もなく、聞き知りて恐れのしかね者もなし。空を翻る禽も翼を收め、地を走る獸も足を止むる。ふは風の事、殊か誠か入日をさへ引戻し玉ひしと、言量の喧し合へる程なれば、如何なる山間の一鳥鳴かず伐木の音のみ聞ける者なりとて、京上りする程の者が入道の武威とも怖れず、舌の囁づる僅に屬るとは、至極の無禮過ぎて、狂氣と言はんか、阿呆と言はんか。さての武士は少年の百萬に纏とせきたち、「禿の君が氣を殺せし」とは何事ぞ、兩刀帯して武士の端くれども見ゆれば、物の作法を解へぬ小僕奴、無禮とは何の體で露くぞ、無位無官の分際として寛體なり、尋常に繩にかゝれ、引摺つて辛う目見せん」と、虎の威を惜る侍、殊様らしくも怒髪倒立立ちて、生際より湯氣の子迄に烈火の如く憤る、遂か離れて危ぶみながら見ゆする人々は、手に汗握りて氣もハラ〜。
開けば都に平相國といへる妖怪ありて、天威を恐れ氣を放題、佛法を重んじて伽藍を齋き、王法を侮りて魔術を修さんとす。魔魔行古今に譲せり。第六天の王が入道の度胸に分け入りて、此日の本を魔界になんとするなるか。
遣真此入道の威儀に恐れて、幕に進へる頭の如く、縮み上れる公卿以上人、皆は諸國の武士、剣へ源の武将と自居する者達が、魔王の勇氣と嘆いて、彼馬に水鉢ひ、鏡の床几を置せるみそ、言甲斐なく浅きに驚いて身を震えたる振舞の如う。

「渠等者惟^{シテ}争^シなり、研鑿^{セシム}て今^ハと黒る聲の頭人の口角より發^シすと共に、貴族の白電は少年の身の邊を縱横して其急^シ擊^ハは評論の異特^ハはよりも果敢^シなし。されど駒王は、打撃取つて鬼神をも怖れず、木曾の小太刀と號^シれたる早業なれば、彼が太刀の走る所必ず一族の駆逐^{スル}に従つて、前なる二人は早横様に躊躇^ハ付されぬ、強れる者も傷を負ふたれど、流石に名を惜みて研り結ぶ。彼が及舞の我鎧^{アマミヤ}元に觸る時は、閃として火花亂れ、太刀風斜めに吹いて、踏鳴^{ハシノミ}す大地の砂塵騒^{ハシノミ}峰。既わらば刀を引いて逃れんど、刀下の鬼は死地に入りて、猶は幾度か活路^{ハシ}を尋ね。されど駆せ加はる捕手の數に、見る／＼釜中の魚となりて、前後左右を犇々と取囲かれ、蟻の退出る餘地も無^カ迄に國^カれたり。

一時の怒^{ハシノミ}を忍び難くして、自から命を縮めし愚を悔ひやせも及ばず、然じ名も無き鼠蠶^{ハシノミ}の手に懲りて大死せんよりは、自ら貢^{ヒサシ}いて伏すには如かず、斯くなるも天なり命なり、何とか僕^{ハシノミ}さんと心を決し、敵の透巡く眼を見て、吾と刃を取直さんとする一刹那、後に睨み人^{ハシノミ}の武士は、走り寄つて無手^{ハシノミ}と斗りに組み附さたり、身を捨つて投げ付さんとすれば、武士の足は大地より生へたちんが如く、自若^{ハシノミ}として小動きもせず、捻伏せんとするを拂返さんと、互に相撲^{ハシノミ}と有様を見るより。四方の捕手は得たりと斗りに折り重なり跡をも打てども事をせず、有無^{ハシノミ}と言はせず駒王が身體^{ハシノミ}を十重二十重に重ひ、容赦なく捕縄にて縛めたり。木曾の野點は官兵の權の裡に容れられて、長嘯^{ハシノミ}されども山嶽騒動かず、見る／＼六波羅^{ハシノミ}へと引かれ行き、明日は確^{ハシノミ}の調査者^{ハシノミ}なりて、駒唇を見するも覺悟なれば、心残りは我身の素性^{ハシノミ}など、流石に駒^{ハシノミ}心も出づるなり。

年若^{ハシノミ}小僧の身として、禿を懲らし武士^{ハシノミ}と折る程の曲老功の齋藤が折^{ハシノミ}し上り居るふそ幸^{ハシノミ}、彼に司の役目を仰せ附けよ、彼ならば源氏方^{ハシノミ}に知己も有り、必定其初見現はすに易かるべけれど評定決して、關方の筆頭^{ハシノミ}を齋藤^{ハシノミ}當選^{ハシノミ}に仰せ付けられける。

駒王は身に繰縄の憂目懸りて、血腥き牢屋^{ハシノミ}の内に併^{ハシノミ}となり、今や引出されて斬らるしか、さらば^{ハシノミ}死角の腰明には、老功の齋藤が折^{ハシノミ}し上り居るふそ幸^{ハシノミ}、彼に司の役目を仰せ附けよ、彼ならば源氏方^{ハシノミ}に知己も有り、必定其初見現はすに易かるべけれど評定決して、此處は山里の廻^{ハシノミ}し案に被束したるが、駒王の邊近く^{ハシノミ}詠み響りて「左右に六人の槍^{ハシノミ}を構^{ハシノミ}して、一騎此方へ進みなれど言はるしが儘に並上りて、かかるゝが儘に行^{ハシノミ}う見れば五十餘りの兵士^{ハシノミ}、年よりは老けて白髮^{ハシノミ}の腰明らしく此世からなる駒^{ハシノミ}の一騎二騎、折り曲りたる牢屋をは案の如くなりしよ、槍^{ハシノミ}を擱^{ハシノミ}ならぬ間に射せらるゝよりて、白騎^{ハシノミ}へとぞ詠かれ候る。

あらんと、騎王は心に嘲笑
「汝は御も何者の子ぞ」と、
「人の子は言はでもの事、生
名は何といふぞ」と、老武者は
此侍中々に曲者なり。こ
言は家の恥、言はぬも心
はんか、言
ふまじきか
と、騎王は
暫時猶豫ひ
「言はされ
ば言はでも
宜し、何が
故に汝は昨日
の狼藉を
觀らかしぞ
「何が故
に禿は昨日
の狼藉を觀
らかしぞ
さしだ、先
づ夫より承
はらんとこそ思ひ候」と
年は更に恐れす。
「禿が何の狼藉と問はず。
「某」が何の狼藉」と少年は
火の如く怒れども、老武者は
の顔は白變と共に白く、
頬に後絶えぬ笑を止む。
しけれども淫靡せり。
「汝は此處と心得
てねはさんと」騎王がいふ
所可笑
されども淫靡せり。
「汝は極氣し居るな、確
実せるものに解決は無用
者は畢竟に諒を含めん
事。某は極氣の小なる
が彼の胸にあると知る